上州文化

contents

特集 世界に二つの縁切寺／髙木　侃 ②
上野東歌探訪／北川和秀 ⑥
ART NOW ガラスに絵画を彫り描く／百川良男 ⑩
INFORMATION／㈶群馬県教育文化事業団 ⑫
カフェの隅から　赤いリボンの／竹田朋子 ⑭

山麓から晩秋の新田山（金山）を望む

財団法人 群馬県教育文化事業団　2010　No.124

世界に二つの縁切寺

資料館の建設と本堂等の復元

― 平成の満徳寺（1）―

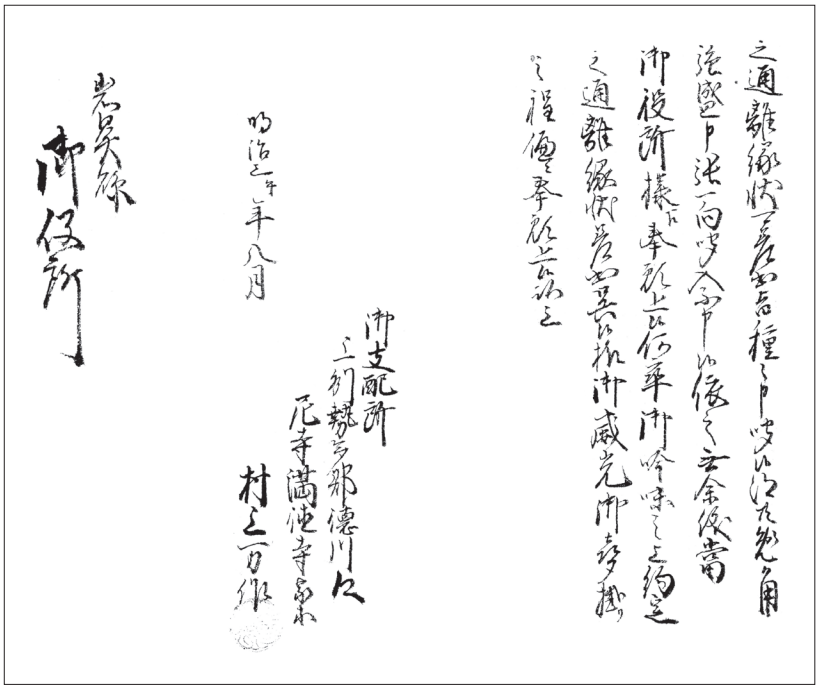
専修大学教授・
縁切寺満徳寺資料館館長
髙木 侃

明治維新と縁切寺

明治維新の変革は、縁切寺にも重大な影響をもたらしました。とくに徳川家ゆかりの寺として、その手厚い庇護を受けてきた満徳寺は、幕府の崩壊によって、財政的基盤を失いました。そして一八七〇（明治三）年正月の「こう」の事例を最後の駆け込み事例とし、また同年八月武州榛沢郡折之口村永三郎妻「まん」の年季明けお声掛かりの事例を最後の離婚事例として（写真1）、それ以後、縁切寺の機能はもとより、寺院そのものの存続すら危うくなり、終に明治五年に廃寺するにいたったのです。

一方、東慶寺においても、明治三年十二月二十日駆け込み、九日後に内済離縁になった「たよ」の事例を最後に、翌明治四年以降事実上縁切寺の機能を停止していたのですが、同年三月神奈川県に対して、縁切寺法の存続許可を願い出て、なお積極的に縁切寺の制度維持を計っています。しかし、この願いは明治政府に容れられず却下され、縁切寺としての東慶寺は完全にその幕を閉じることになりました。明治初年の縁切寺終焉にあたっての両寺の姿勢は、実は前代徳川幕府に対する両寺の独立性の強弱を如実に物語っていますが、まさに両極端をなしています。

ここに、徳川時代にあって妻の離縁請求権を擁護する縁切寺という特殊な制度として残存した、古くからの寺院アジール（避難所）は、国家権力によって完全に否定されたのです。そして、明治維新の変革は、当然離婚法上にも大きな改革をもたらし、明治六年五月十五日に太政官第一六二号布告が発布されます。これによって「やむをえざる事故があって離縁を請うも夫がこれを肯んぜざる」ときは、妻は「人民自由の権理」を護るため、裁判所に離婚の訴えができることになりました。ここに、妻の離婚請求権は全面的に容認されるにいたるわけですが、これは離婚法上大局的にみれば、縁切寺の終焉の延長上に位置することになりま



【写真 1】「まん」吟味願書（部分）ー満徳寺から岩鼻県あてー

しょう。いずれにせよ、縁切寺の禁止をもって、徳川時代に終わりを告げ、明治六年の太政官第一六二号布告をもって、離婚法上の明治維新を迎えたといえます。

全町史跡公園化構想と満徳寺

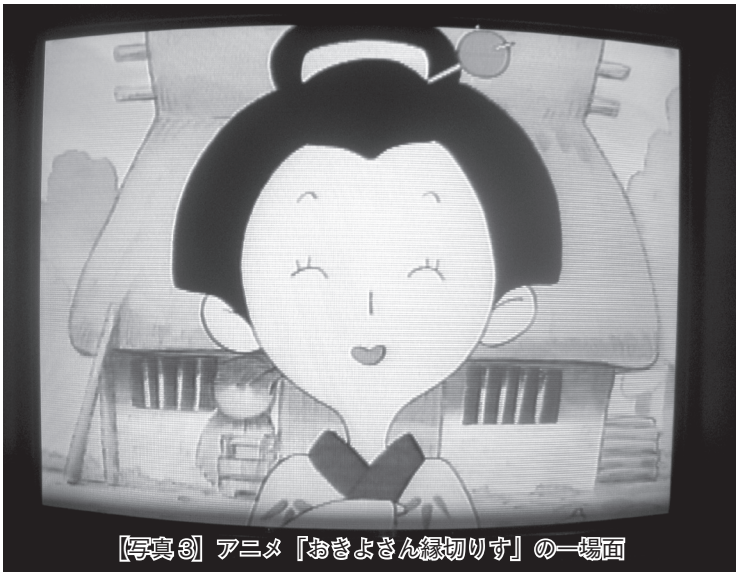
満徳寺が所在したのは上州勢多郡新田庄徳川郷です。周り中が新田郡にも関わらず、徳川村が徳川家とゆかりのある特別な村であることを、中世的な住所表記にこめています。四五〇石の御朱印地だったのですから当然といえば当然です。町では歴史と文化のかおり豊な町全体を史跡公園化する構想のもとに、岩松尚純連歌の里、禅文化発祥の里、中島飛行機王の里、あかがね街道と尾島宿の里、大館と新田触れ不動の里とならんで「縁切寺満徳寺の里」の整備に臨んだのですが、当初は旧本堂を取り壊し、その跡地に総予算一億円規模の資料館を建設する予定でした。そこで町長・三役をはじめ、町会議員、社会教育委員など関係者をバス一台で、鎌倉の東慶寺見学にお連れし、書院、本堂、水月堂を拝観し、墓域で文化勲章受章者の墓をめぐり、ついで円覚寺では願って国宝の舎利殿も拝観し、帰途のバスのなか、東慶寺を見学に来た方の五〇人のうち一人でも満徳寺に来るかもしれません。ですから東慶寺にあまり見劣りしたものなら、作らないで、今のままでよいと、私は力説しました。その後、昭和六十二年整備基本計画策定委員会を発足させ、計画書の策定を進めます。それを町当局に答申すると同時に縁切寺満徳寺資料館建設委員会を発足させました。ちょうど「ふるさと創生」特別対策事業の公募があり、答申書の表紙だけ付け替えて応募し、県内では前橋市の国分寺整備とならんで満徳寺の整備事業に文化庁から四億円の補助を得ることになりました。私も委員会の委員として当初から専門的意見を申上げてきました。

縁切寺満徳寺資料館開館

さて、整備事業は年次計画で進めましたが、できるところから、始めることとし、まず駆け込み門の前に二本の「縁切り欅」を植え、ついで平成二年三月には駆け込み門を復元、資料館の建設のめどがつくとともに、委員会は満徳寺史跡整備と名称を変え、満徳寺本堂、門、塀及び庭園の復元工事に着手します。この間、縁切寺満徳寺資料館は平成四年十月二十七日に開館記念式典を催し、翌二十八日から一般公開しました（写真2）。

【写真2】資料館外観

ところで、県内の町村立の資料館がそれなりに努力し展示に工夫をこらしていますが、年間五、六千人の入館者に止まっていることと、最寄り駅東武伊勢崎線世良田駅から徒歩四〇分というアクセスの悪さから、資料館の建設に当たって、最も留意したことは、一万人を超える入館者を迎えることでした。それには、まず若い女性をターゲットにすることです。そこで私は第一回目の会議で、女性週刊誌の

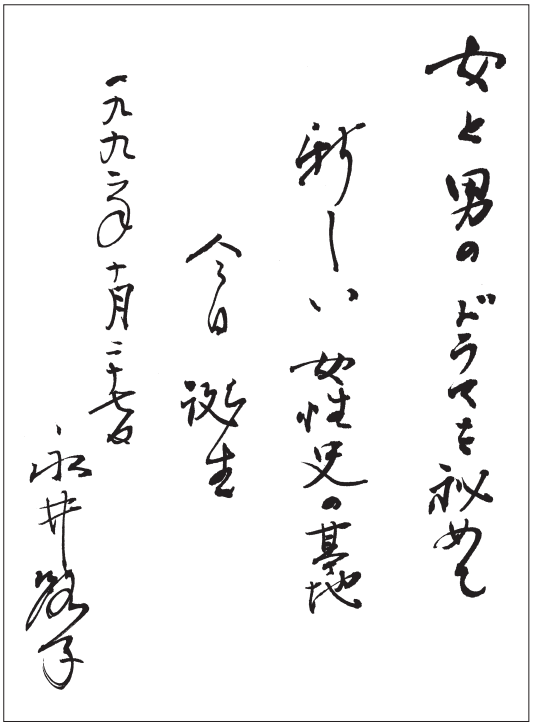


【写真3】アニメ『おきよさん縁切りす』の一場面

切抜きなどを用意して「縁切り・縁結び厠」を提案し、趣旨に賛同してもらったのです（詳しくは次号）。館へのリピターは、春秋の企画展を楽しみに見学される方と厠に祈願で訪れる方に限られるようですので、「縁切り・縁結び厠」は卓越したアイディアだったと秘かに発案者としてほくそ笑んでいます。

つぎに解説に工夫をこらすことでした。展示物は勿論のこと、ビデオ映像による案内も提案しました。その結果、「満徳寺の歴史」とアニメーションで縁切寺の解説を行う「おきよさん縁切りす」の二本を作成しました。日本むかし話でおなじみの市原悦子さんのナレーションになるビデオが館内を流れて好評です。アニメでは、二十五ヶ月の在寺をへて寺法離縁になった太田町二丁目の「ふさ」（後に寺役人の養子と再婚）を案内役として、すべて事実に即した話を再現しています（写真３）。最後は、別所村（現・太田市）の「まつ」が不法な夫に対して「満徳寺に行くよ」と脅して離縁状を取り上げる場面で、ほとんどの見学者の笑いを誘います。「ふさ」最後のセリフは再婚相手と相合傘（あいあいがさ）のなかで、「やっぱり夫婦は仲がいいのが一番いいわよね、あなた」といわせています。当館はむかし縁切寺ですが、今は電話番号下４ケタ「２２７６」の通り、「夫婦になろう」「夫婦仲睦まじく」と夫婦の縁を結んだり、強めたりすることを願っています。

いよいよ開館です。十月二十七日に開館記念式典が二〇〇人ほどの関係者を集めて盛大に開催され、翌日小出町長をはじめ、議長・教育委員長などで開館のテープカットが行われ、その後、会場を移し、シンポジウム「女の自立―過去・現在・未来―」が小説家永井路子さん、当時資料館に研究に来ていたダイアナ・ライト・フォスさん（満徳寺の研究で学位を取得し、現・西ワシントン大学准教授）、地元世良田小校長の小沼道子さんや東京都女性相談センター所長をパネラーとして行われ、永井さんには「戦国の女たち」と題する講演も行なっていただき、たくましく生きた女性を取り上げ、さらに満徳寺に入寺した千姫にも論及していただきました（写真４）。



【写真４】講演する永井路子さんとその揮毫

満徳寺本堂の復元

本堂等の復元に当たっては、まず当時の建物の位置を確認するためにトレンチを入れて境内地をタテヨコに発掘しました。本堂東側からか土器（かわらけ）が発掘され、これが元御供所（接待所）であり、当時の境内図の正確さの証明になりました。本堂の復元には、明治二十八年頃、最後の住職の養子・浅井銕五郎（寺役人川越小兵衛の子）が幼児の記憶に基づいて作成した境内図（本誌一二〇号参照）と県立文書館所蔵の「文政度御修復在形之図」の二面に基づき、発掘の状況をふまえて整備が行われました。旧境内地は一部私有地で民家が三軒ありましたが、すべて公有地化し、民家には移転してもらって、平成五年に本堂の復元が始まりました。建築はすべて江戸時代の工法によるもので、釘を用いず、とくに本堂の茅葺（かやぶき）形状銅版の屋根を葺いているときは、多くの板金屋さんが見学に訪れたほどです。また建築工事中には、ＮＨＫ大河ドラマで建築の時代考証をなさっておられる平井聖東工大名誉教授を招き、現地解説会も開催しました。このほか、冠木門を初めとする門や塀、さらに庭園の整備がなされました。遺跡整備後の本堂等は表題部（本稿二頁）の写真をみていただければ、「中門から本堂を望む」様子がおわかりと存じます。資料館と本堂復元など遺跡公園整備の総事業費は約八億五千万円で、人口一万四千人余の小さな

町としては破格な事業で、よくやりとげたものだと思います。それだけ歴史と文化を大切にしてきた町ということです。

東慶寺との友好姉妹館提携

本稿の題名は「世界に二つの縁切寺」です。合併前の尾島町カルタでは「満徳寺、日本に二つの縁切寺」という読み札でしたが、平成十七（二〇〇五）年三月合併後の太田市カルタでは、「満徳寺、世界に二つの縁切寺」になりました。私が満徳寺は東慶寺と並んで世界に二つの縁切寺と言い続けた所為（せい）でありますが、はっきりと意識的に発言することにしたのは資料館開館にあたって、東慶寺の宝蔵（資料館）と友好姉妹館の提携をした時だろうと思います。開館当日、資料館側から、小出尾島町長と館長の私、東慶寺側から井上正道住職、縁切寺研究者であります前住職・井上禅定老僧の四名が、陶板に焼き付けた「満徳寺へ駈け入りの図」の前で、協定書に署名・捺印して交換しました（写真5）。

協定書の冒頭には東慶寺と満徳寺はともに鎌倉時代の創建されましたが、「江戸時代には、不法な夫に泣く女性を救済した縁切寺として有名だった。このような女性の権利を擁護した縁切寺の制度は、諸外国にはみられず、世界に二つしか存在しなかったのである」と明確に述べています。ついで東慶寺が今日も男僧の寺として名刹の名をほしいままにしている一方で、満徳寺は廃寺後、徳川地区の人々によってかろうじて維持されてきました。しかし、尾島町では、満徳寺の意義にかんがみ、資料館とその遺跡整備をなし、旧伽藍（がらん）の完全復元をめざしていることにふれ、「両資料館は、縁切寺の意義を広く社会的に理解させることに努力するとともに、相互に交流し、友好を深め、女性の権利の擁護、男女の本質的平等に寄与することを念願し、ひいては世界平和に貢献することを確信して、ここに友好姉妹館として提携することを協約する」とあります。ここに資料館の意義があります。

【写真 5】東慶寺と友好姉妹館提携に調印

いま、アジールからの出発

資料館では、来館者にいま「アジールからの出発」として、次のようなメッセージを発しています。一部を紹介して筆を置きますが、皆様の御来館を心よりお待ち申し上げます。

現在、法的に男女平等が保障されているとはいえ、実質的に男女差別がなくなったといえる状況ではありません。かつて差別は男女間に顕著にみられ、縁切寺は夫の不法に泣く女を救済して、離婚を達成できたことから差別撤廃の原点といえます。

縁切寺は駆込寺とも呼ばれ、生命・身体の危険を避けるために駆け込むアジール（避難所）でした。国際的な政治亡命や難民、身近ないじめ、家や家族の問題もその解決の淵源はアジールにあります。

このアジールを現代女性の縁切り・縁結びの出発点にしてほしいものです。

髙　木　　侃（たかぎ・ただし）

【プロフィール】

1942 年生。中央大学大学院法学研究科修士課程修了後、関東短期大学教授をへて、現職。国際日本文化研究センター客員教授等歴任。満徳寺の研究で法学博士。主要著書に『増補　三くだり半－江戸の離婚と女性たち－』（平凡社ライブラリー）、『縁切寺満徳寺の研究』（成文堂）、『三くだり半と縁切寺－江戸の離婚を読みなおす－』（講談社現代新書）などがある。

上野東歌探訪

北川和秀（きたがわかずひで）　一九五一年生。学習院大学大学院人文科学研究科国文学専攻博士課程修了。同大学助手を経て、一九八五年群馬県立女子大学文学部専任講師。現在は同大学教授。専門は上代文学。主な著書に『続日本紀宣命　校本・総索引』『群馬の万葉歌』など。

前回は伊香保をよんだ歌の中から、雷の歌、からっ風の歌を取り上げた。今回はそれに引き続き、伊香保の雪をよんだ歌を取り上げる。万葉集東歌の巻において、国別に分類された歌の内部は歌の素材によって分類配列されている。前回と今回とで取り上げる三首は、気象を素材にしているという共通点があり、三首並んで配列されている。

また今回は、万葉歌碑について触れて欲しいというご要望にお応えして、伊香保の万葉歌碑の紹介もあわせて行うことにする。前回と今回、伊香保の歌を扱っているので、その関連でまずは伊香保の万葉歌碑を取り上げる。今後、折に触れて他の万葉歌碑も紹介してゆきたい。

一、歌の解釈

上毛野伊香保の嶺ろに降ろ雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり（三四二三）

可美都気努　伊可抱乃祢呂尓　布路与伎能　遊吉須宜可提奴
伊毛賀伊敝乃安多里

上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではないが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ。

「上毛野」は上野国、すなわちほぼ現在の群馬県。「上毛野」については次節において少し述べる。

「嶺ろ」は上代東国方言。「ろ」は接尾語で親愛の情を表す。「嶺ろ」という語は、万葉集では東歌にのみ十一例見える。国別の内訳は、相模一例、上総二例、常陸三例、上野二例、国名不明三例である。

「降ろ」は「降る」の方言形で、中央（近畿地方）における四段活用動詞連体形の母音のウ列音が東国においてオ列音になったもの。同様の例に、「引く船の」→「引こ船の」（三四三一。相模国東歌）、「立つ月の」→「立と月の」（三四七六。国名不明）、「沖に住む」→「沖に住も」（三五二七。国名不明）、「行く先に」→「行こ先に」（四三八五。下総国防人歌）、「舳越す白波」→「舳越そ白波」（四三八九。下総国防人歌）などがある。

「雪（ゆき）」を「よき」というのも東国方言であろう。これも中央のウ列音が上野国でオ列音になっている。「雪」は東歌に二例登場する。もう一首は「筑波嶺に雪かも降らる否をかも愛しき子ろが布乾さるかも」（三三五一。常陸国東歌）という歌で、この歌では「ゆき」という語形で現れている。東国の中でも、語によって国ごとに方言の相違がみられる。『日本国語大辞典　第二版』の「ゆき【雪】」の項には、〈なまり〉として日本各地の発音が示されているなかに、ヨキ〔栃木・石川・鳥取・島根〕、ヨギ〔津軽語彙・岩手・秋田・山形〕、ヨギコ〔津軽語彙〕という形が載っている。上野国東歌の「よき」はこれらと関係づけて考えられよう。

「かて」は、可能の意味の補助動詞「かつ」の未然形。「かてぬ」は、それに打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」が付いたもので、「～することができない」の意を表す。

「妹」は、万葉集においては、多くは男性が親しみを込めて自分の妻や恋人を指す語である。この歌でも同様。相聞歌において「妹」という語が出てくれ

ば、作者の性別は基本的に男とみて間違いない。

上三句「上毛野伊香保の嶺ろに降ろ雪の」は、「雪」の類音の「行き」を起こすための序詞。「雪」と「行き」との同音による序詞の例としては、万葉集の巻六に次のような歌がある。

わが屋戸の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ（一〇四一）

意味は、「わが家の、あなたを「待つ」という「松」の木に降る「雪」ではないが、私の方から進んで「行く」ことはしますまい。あなたのおいでをひたすらお待ちしましょう」。「松」と「待つ」、そして「雪」と「行き」とを掛けた、上代の歌には珍しい技巧的な歌である。題詞によれば、天平十六年（七四四）の正月五日に開かれた宴会の折の歌という。新年の宴席における余興としてこういう遊びの要素の多い歌を作ったのであろう。この歌では、「雪」と「行き」との関係は単に音が同じということでしかない。

一方、伊香保の歌では、「雪」は「よき」という語形であるため、「行き」と同音ではない。その点で序詞としては多少無理をしたものになっている。そして、上三句は単に「雪」と「行き」との類音関係だけに基づく序詞ではなく、雪の山道は歩行が困難だという、そういう事柄をも踏まえた比喩的な序詞になっている。

雪の降りしきる榛名山の山道を歩くのが困難だというのは、この歌の作者の実体験であろう。今、作者が彼女の家の近くまで来ている季節は、冬かもしれないし、夏かもしれない。彼女の家の場所も山の中かもしれないし、里かもしれない。それらはどうであっても、彼女の家の近くをたやすく通り過ぎることが難しいという比喩として、榛名山の雪の山道を持ち出してきたのである。

作者の実体験を比喩として用いた歌に、たとえば次のようなものがある。

利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（三四一三）

上野国の東歌である。いずれまた改めてこの連載で取り上げることになるので、今は簡単に述べる。歌中に「君」とあることから、作者は女である。意味は、「利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまったように、ばったりと出会ったあなたであることよ」。

女は全く予期せずに、自分が心を寄せている男と出会ってしまったので、びっくりした。どんなにびっくりしたかを述べるために、かつて利根川を渡っていたときに不意に波を受けてびっくりした経験を比喩に用いたのであろう。男と不意に出会った場所が利根川だというわけではない。

この歌も、今回問題にしている歌も、作者の日常生活における実体験を比喩に用いているという共通点がある。こういう身近な日常生活が歌に反映しているというのも東歌の特徴の一つである。

元の歌に戻る。この歌の作者は恋人の家の近くに来ているのだから、「たやすく行き過ぎることができない」などと言っていないで、家に寄ってゆけば良さそうなものだが、そうできない理由があるのだろう。娘の親（特に母親）が二人の仲を認めていないとか、近所の目が気になるとか、そういったことが想定される。このことに関しては、たとえば次のような歌が参考になろう。

汝が母に嘖られ吾は行く青雲のいで来吾妹子逢ひ見て行かむ（三五一九）

国名不明の東歌である。意味は、「あなたのお母さんに怒られて私は帰ります。でも、家から出てきてくれないかなぁ、彼女。ちょっとだけでも会って帰りたいから」。

母親が娘を監督していたことを示す歌は万葉集に何首もあり、これもそのう

長峰公園にある「伊香保の嶺ろに降ろ雪の」の歌碑

ちの一首である。作者は彼女の家の近くまで来て、家の様子を伺っていたのかもしれない。ところが、あいにく彼女の母親に見つかってしまい、怒られて、すごすごと帰ってゆく。でも、彼女に一目でも会いたいから、そう簡単には帰れない。まさに「行き過ぎかてぬ妹が家のあたり」といった状況と思われる。

二、「上毛野」について

「上毛野」は「上野」の旧表記。古く群馬県のあたりは「かみつけの」の国と呼ばれ、「上毛野」国と表記されていた。ところが、大宝年間（七〇一年～七〇三年）に、国名は漢字二字に統一されることになった。

古くから二字の国名も多かったが、中には一字や三字のものもあった。

一字の国名には、倭（やまと・奈良県）、嶋（しま・三重県の一部）、木（き・和歌山県）、粟（あは・徳島県）などがあり、三字の国名には、近淡海（ちかつあふみ・滋賀県）、遠淡海（とほつあふみ・静岡県西部）、上毛野（かみつけの・群馬県）、下毛野（しもつけの・栃木県）、无耶志（むざし・東京都と埼玉県）、多遅摩（たぢま・兵庫県の一部）、波伯吉（ははき・島根県東部）などがあった。

これらの国名は、倭→大倭、嶋→志摩、木→紀伊、粟→阿波、近淡海→近江、遠淡海→遠江、上毛野→上野、下毛野→下野、无耶志→武蔵、多遅摩→但馬、波伯吉→伯耆、などと変更され、すべての国名が二字化されたのである。

古くからすでに二字であったのに、表記が変わったものもある。たとえば、三野（みの・岐阜県の北東部以外）→美濃、科野（しなの・長野県）→信濃、稲羽（いなば・鳥取県東部）→因幡、針間（はりま・兵庫県南部）→播磨、などである。これらの表記の変更には、訓から音へという共通点がある。

このような、国名表記の二字化、訓から音へという変更がなされた理由は明らかでないが、中国の地名表記を意識してのものではなかったかと推測する。当時、わが国では、中国の法律をお手本にした大宝律令が作られ、本格的な律令制の国家を目指して歩み出していた。中国の地名は基本的に漢字二字であり、そしてよみは当然、音である。中国の地名を意識したとき、わが国の一字や三字の国名、そして訓による表記は垢抜けないものと感じられたのではあるまいか。前掲の三野・科野・稲羽・針間など、いずれも素朴な表記であり、変更後の美濃・信濃・因幡・播磨の方が格調高く、エラそうに見える。

こうして、大宝の頃、日本の国名表記は大きく変わったが、変わったのは表記だけであり、訓みは従来通りで変更はなかった。たとえば、「木国」（きのくに）の場合、表記は「紀伊国」と変わっても、訓みが「きいのくに」になったわけではなく、訓みは「きのくに」のまま変更はなかった。遙か後世の江戸時代の豪商、紀伊国屋文左衛門の屋号のよみは「きのくにや」であり、全国展開している現代の大型書店の名も同様である。

「上毛野」の場合、二字化に当たっては、この三文字のうちの第二字目の「毛」という文字を削除して「上野」とするという、かなり安易な方法が採られた。変更後の「上野」という表記では「かみつけの」とは到底訓めないが、訓めなくても約束事として「上野」を「かみつけの」と訓ませたのである。

時代が降ると、「かみつけのの国」は「の」が重複しているように感じられて、「の」が一つ落ち、「かみつけの国」となった。これがさらに音韻変化を起こして、「かみつけ」→「かんづけ」→「かうづけ」→「こうづけ」→「こうずけ」と変化していった。「上毛野」と書いて「かみつけの」と訓んでいた頃は、表記と訓みとが一致していたのに、表記も訓みもそれぞれに変化した結果、「上野」と書いて「こうずけ」と訓むというような、大きな開きが生ずるに至った。地名の無理矢理な漢字二字化は国名に留まらず、郡名や郷名にも及んだ。今日、「なぜそう読むのか分からない」という地名の中には、その原因が一三〇〇年前の地名二字化に由来するものも少なからずある。そういうことを知るのは楽しい。

こうした正書法というべき公的な地名表記は、万葉集においては、題詞や左注といった漢文部分の中ではかなり厳格に行われているが、歌の表記には及んでいない。特に東歌は原則として一字一音の万葉仮名で表記されているので、「かみつけの」は、「可美都気努」（九例。三四〇四、三四〇五、三四〇七、三四一五、三四一六、三四一七、三四一八、三四二〇、三四二三）、「可美都気野」（二例。三四〇六、三四三四）、「賀美都家野」（一例。三四一二）、「可美都気乃」（一例。三四〇五或本歌）と表記されている。

なお、「上毛野」は「かみつけぬ」と訓まれることがあった。これは右に示した万葉仮名の「努」の字を「ぬ」の仮名と理解したことによる。今日、研究

の結果、万葉集の「努」の仮名は「の」という音であったことが明らかになったので、「上毛野」は「かみつけの」と訓むのがよい。

三、伊香保の万葉歌碑

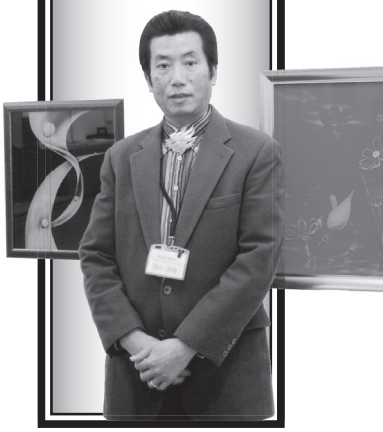
万葉集東歌には「伊香保」という地名を含む歌が全部で九首ある。旧伊香保町（現在は渋川市の一部）では、昭和五十七年にそれらの歌全ての歌碑を町内九ヶ所に建立した。様々な形の自然石を使用しており、それぞれに趣き深い。揮毫はすべて伊勢崎市出身の書家、佐々木心華氏に依るもので、傍らに解説板が設置されている。それらの歌碑の一覧表と地図とを示す。

伊香保の万葉歌碑一覧

	歌番号	歌	歌碑の所在地
①	三四一〇	伊香保ろの岨の榛原ねもころに 将来をなかねそ現在し良かば	森林公園管理棟前
②	三四二三	上毛野伊香保の嶺ろに降ろ雪の 行き過ぎかてぬ妹が家のあたり	長峰公園（池の前）
③	三四〇九	伊香保ろに天雲い継ぎかぬまづく 人とおたはふいざ寝しめとら	ロープウェイ 美晴駅横
④	三四三五	伊香保ろの岨の榛原吾が衣に 着きよらしもよひたへと思へば	ロープウェイ 不如帰駅前
⑤	三四一五	上毛野伊香保の沼に植ゑ小水葱 かく恋ひむとや種求めけむ	湯元飲泉所横
⑥	三四一四	伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の 顕ろまでもさ寝をさ寝てば	伊香保神社境内
⑦	三四二二	伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へ ど吾が恋のみし時なかりけり	旧ハワイ公使別邸隣
⑧	三四一九	伊香保せよ奈可中次下思ひどろ くまこそしつと忘れせなふも	峠三叉路
⑨	三四二一	伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には 故はなけども子らによりてそ	水沢観音境内

特殊洋画「絵ガラス」

ガラスに絵画を彫り描く



●絵ガラス誕生

絵ガラス、と言う言葉は、今までに聞きなれない言葉であったと思います。何故かと言いますと、私が、命名した作品名だからです。

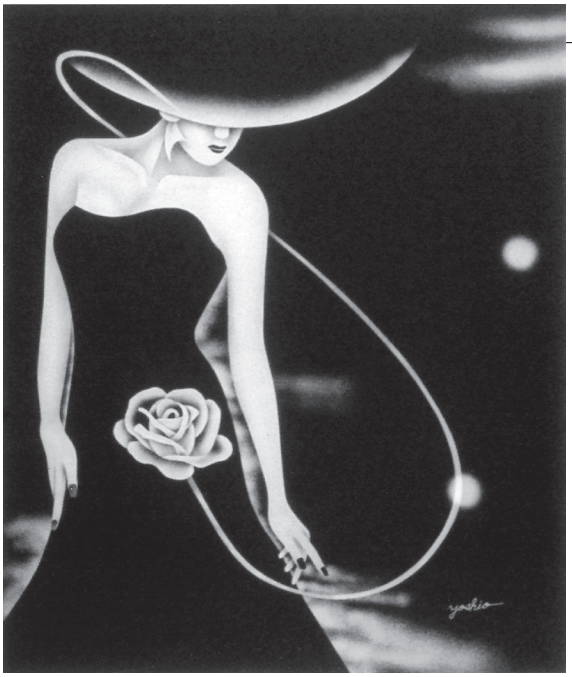
「絵ガラス」の誕生は、一九九一年迄さかのぼります。当時まだ会社に勤めておりました頃、鉄を削りながら機械の部品を造っていました。そんな時、鉄に腐食したよごれを落とす為に砂を吹きかけ使っていたサンドブラスターと言う道具がありました。私がいたずらに牛乳瓶に砂を吹きかけてみると、瓶に穴が開いたのです。私の感性で脇に何個か穴を開け花瓶として花を活けたら面白いと思い、家に持って帰って来て妻に見せました。妻が突拍子も無いことを言うのでびっくりしました。「ガラスが削れて穴が開くと言う事は、もしかしてガラスを削り彫りながら美の表現が出来ないの」と一言いわれたのです。妻に、美の表現ってどう言う事、と聞き返しました。そしたら「絵を描く事が出来るのじゃない」と言うのです。私は、ええー、絵、むり無理、今までに、そんなの見たことがないのでむり無理と、妻に言い返しました。妻は、諦めずに言い返してきました。「一回もためした事がないのに結果なんて出る訳がないじゃない。」と言われ、試して見る事にしました。

道具も一番小さいサンドブラスターを買い揃え私の挑戦が始まりました。とにかく誰もやっていないゼロからのスタートです。独学で聞く人もなく、私一人だけの感性で何処まで出来るのか、先が見えず色々とやり方を考え、瓶、コップ、花瓶と試してみましたが、材料を無駄にする事ばかりでした。そんなある日、何故か妻が「ねえ、普通は絵を描く時は平らな用紙に描くのだから板ガラスにして見たら」と、言ったのです。あっ、そうか、板硝子をキャンバスの代わりにすれば良いのか、と、妻の言葉に即同意しました。それからも又、色々考えながら、今度は板ガラスを失敗し捨ててばかりの日々が続きました。失敗を繰り返す中で何故か私の考えたオリジナルデッサンを一枚の板ガラスに私の思いを彫り描き、完成させたいと言う思いが段々と膨らんで来てました。まだ完成していないのですけれども、楽しくなってくるのを感じてました。もしかして妻の言った事が本当に実現するのではないかと思いました。何故、妻の意見を素直に聞いたのかと言いますと、私の気持ちの中で画家になりたいと言う気持ちが心の奥底に潜んでいたからです。

●公募展の入選続く

それから、一年が立ち、作品がようやく、絵らしくなって来ました。誰もまだ私と同じ技法で作品を発表している人はいませんでした。私は第一人者として知的所有権登録し「絵ガラス」と命名致しました。今となって見ると当時の作品は恥ずかしくて見せられません。そんな中、月日が立ち作品もたまり始めた頃、妻の友達の紹介で一九九四年ホテル天坊ギャラリーにて個展をやって皆さんに見てもらったら、と言う事になり、初めての個展を開催いたしました。その後はもっと絵に近づいた作品を描き出したいと思い作品に徐々に力が入って行きました。デッサンも独学、ましてや板ガラスに絵画を彫り描くのも独学、そんな中で一九九六年、全国公募展で上野にあります「東京都美術館」で開催する第一美術協会主催の美術展に出品して見たら、と言われて出品してみたところ、運が良く入選致しまして、大勢の皆さんに見て頂く事が出来ました。そして、上毛新聞の取材の人が来まして、入選を記事に乗せ紹介したいと、言って来ました。記者に聞いて見ましたら、たまたま全国公募展に、一般の応募で入選した人が群馬県で一人でしたとの情報が入りましたので、うかがいました。と言うのです。その時はうれしかったです。

「絵ガラス」と命名してからは、とても運がよくて私の知らない力で「絵ガラス」を世の中のより多くの人達に知ってもらい、見てもらいなさいと言う力で引っ張られている様な気がしています。同時に絵的感覚の感性も私に備わって来ている様です。一九九九年、松本美術学院、岩淵陽人学長より、私の作品、「親子の楽園」と言う30号のサイズの「絵ガラス」の評価で、「工芸と言うよりも私は絵として評価を致します」と言って頂きました。絵として見て頂けたと感激致しました。



●「絵ガラスアート・美良」を設立

その後、渋川「広域よみうり」に取り上げられ、ガラスが表現の場、絵として確立と言う記事で掲載されました。

そして、赤城インターの近くに、店舗兼アトリエを造りました。「絵ガラス」を展示しながら、もっと皆さんに見ていただきたく、移転計画を立て、翌年、二〇〇〇年に「絵ガラスアート・美良」を設立しました。今までの環境と違い、とても静かで作品に没頭出来る環境です。二〇〇一年には群馬経済研究所・調査月報に取り上げられ、「人その作品」として紹介されました、その後、群馬テレビに取り上げられ「群馬ウイズユー」に出演致しました。二〇〇三年には、ＩＡＣ美術会選抜展に出展（豊科近代美術館)する事になりました。考えて見ると、「絵ガラス」の発表に関して、非常に運の良い人生を送らせて頂いており、心より感謝致しております。

●一回限りの感性で

今度は、「絵ガラス」を描き続けている思いを、少し書かせて頂きます。「絵ガラス」を始めた時はまだ趣味的でした。彫り描いている内に、段々とエスカレートして来ました。私の思いを、ガラスのキャンバスに彫り描き世の中に発表したい、大勢の人に見て頂きたい、と、いう思いがどんどん膨らんで来ました。美術展にも数多く出展致しました。受賞歴も、今現在で十二回受賞しております。「絵ガラス」を彫り描く時は、絶対に消す事の出来ない作品と言う事を脳裡にやきつけます。決して失敗の許されない、一回限りの感性を高め、一か所ずつ集中しながら、少しずつ彫り描きます。彫りの深さを変える事により微妙な濃淡と繊細な表情を描き出します。その為、妻に、彫り描いている時は、絶対に話しかけないで、電話、面会、全て取次しないで、と、言っております。もし、失敗しましたらその日は、感性が悪いと判断し、彫り描くのをやめます。私の作品は優美な女性のしぐさを彫り描いた作品がおもなものです。全て独学ですので自由に描きたい物を描いております。工芸と絵画の思想を混在させながらも美の表現を収得し、自分自身の絵画性を確立しながら、作品を見て頂き、一歩一歩進んで参りました。評価の言葉を掛けて下さる方々を、私の先生と思っております。皆さんの良い参考意見を頂き、個展が終了する度、次の新作のステップにつながり毎年新作の発表が出来ております。これも皆さんの御蔭です。本当にありがとうございます、感謝致しております。

今ではより多くの人達に見て頂きたいと思い、二〇〇七年より百貨店での個展をメインに活動を、展開しております。ガラス絵画特殊洋画「絵ガラス」第一人者として全国各地で展開中です。二〇一〇年に入ってから、私の「絵ガラス」のデッサンを使って牛革バッグを造りブランドとし、販売しませんか、と、言う話が持ち上がりました。ようやく、二〇一〇年九月十一日から、「絵ガラス」デッサンに入り牛革バッグ、ブランド、「エムオー」として販売開始となり、とてもうれしく思っております。今回この冊子に掲載しております「絵ガラス」写真の題名は「舞う薔薇」はバッグに入れた作品です。

今後も失敗の許されない、一回限りの感性で彫り描くガラス絵画「絵ガラス」を発表し続けて行きます。

特殊洋画家　百川良男

【略歴】
1952年　新潟県新潟市に生まれる。
1992年　独学にて一枚の板ガラスをキャンバスに置き換え、独自の絵画を確立。
ガラス絵画を知的所有権登像し、「絵ガラス」と命名。
1996年～　各美術団体　美術展　出展（受賞歴12回）
◆群馬県人物画協会 ◆IAC美術会 ◆第一美術協会
◆国際美術審議会 ◆群馬県作家協会
2007年　三越／新潟店　個展
2008年～2009年　東京都千代田区丸の内帝国劇場・地下1階にて一年間常設展示
2009年　NHKテレビに取り上げられ画家として紹介される。これを転機に特殊洋画家として新たな道を歩く。
2010年　絵ガラス、オリジナルデッサンを牛革バッグに取り入れ、ブランドMO（エムオー）として誕生、販売開始。
【百貨店個展歴】
◆三越　◆京成百貨店　◆高島屋　◆八木橋百貨店　◆大和
◆まる広百貨店　◆十宇屋山形店　◆東急百貨店
現　在　社団法人群馬県作家協会会員
群馬県渋川市赤城町津久田3951-3に在住
TEL：0279-60-3020

平成22年度

チケット発売中

第34回県民芸術祭

2010 GUNMA PREF. ART FEST.

美術 ■ 音楽 ■ 舞踊 ■ 芸能 ■ 演劇 ■ 映画 ■ 文芸

ぐんま郷土芸能の祭典 ［全席自由］500円

1月29日（土）「伝統歌舞伎公演」 ベイシア文化ホール（小ホール） 11：00開演（10：30開場）

出演・演目

みなかみ歌舞伎保存会（みなかみ町）
仮名手本忠臣蔵七段目　祇園一力茶屋の場

赤城古典芸能部（渋川市赤城町）
奥州安達ヶ原三段目　袖萩祭文の場

みなかみ町こども歌舞伎（みなかみ町）
絵本太功記十段目　尼ヶ崎閑居の場

司会・解説　**葛西聖司（NHKエグゼクティブアナウンサー）**

1月30日（日）「上州八木節祭り公演」 ベイシア文化ホール（大ホール） 10：00開演（9：30開場）

【出演】赤羽八木節保存会（館林市）、あづま八木節会（伊勢崎市）、太田市八木節連合会A（太田市）、太田市八木節連合会B（太田市）、尾瀬八木節愛好会（利根郡片品村）、上池八木節保存会（高崎市）、神谷八木節会（伊勢崎市）、桐生八木節連絡協議会（桐生市）、五代目堀込左源太一門会（みどり市笠懸町）、下小鳥町舞踏保存会（高崎市）、昭和町子ども会八木節（伊勢崎市）、上州八木節会（伊勢崎市）、上州八木節保存会（みどり市笠懸町）、二之宮八木節会（前橋市）、八寸町八木節愛好会（伊勢崎市）、前橋八木節協会（前橋市）、三林八木節愛好会（館林市）、妙義八木節会保存会（富岡市妙義町）、八斗島民芸保存会（伊勢崎市）

ゲスト出演　新保広大寺節保存会（新潟県十日町市）
解説　井田安雄（元群馬県文化財保護審議会委員）

観世流能楽鑑賞会 2月19日（土）

ベイシア文化ホール（大ホール）

ワークショップ　11：00～12：00（10：30開場）
演能　13：00開演（12：30開場）
［全席指定］S席4,500円　A席3,000円
（学生1,000円）＊未就学児入場不可

仕舞	屋島	浅見	重好	
	班女	岡	久広	
	天鼓	武田	尚浩	
狂言	佐渡狐	破石	晋照	
		野村	萬斎	
能	松　風	シテ	武田	宗和
		ツレ	下平	克宏

※この事業は宝くじイベント共催事業として実施します。

平成22年度 第48回群馬県文学賞

短歌部門小林功さんほか5名の受賞者決まる！！

このたび第48回を迎えた平成22年度の「群馬県文学賞」の受賞者が決定した。

この文学賞は「本県における文学活動の振興をはかるため、一年間における文学各部門の創作活動のうち、特にすぐれたものを選奨」するもので、7部門に分かれています。残念ながら今年は評論部門では該当作がありませんでしたが短歌、俳句、詩、小説、随筆、児童文学の6部門で心のこもった力作が受賞されました。

○短歌部門　小林　功　受賞作「『いのち』30首」

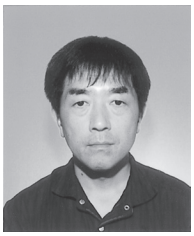
今回受賞した「いのち」と題する三十首は医師の体験に基づく命、老いへの思いが誇張なく表現されている。「思案して決断したる検査なり病廊に待つ妻と目が会ふ」

自ら消化管検査を受けることになって患者のことを思い、妻を思う人間的な温かさ、生と死を思う深い思索など、作者独自の特色ある作品が高く評価された。（髙橋誠一委員選考概要から）

○俳句部門　矢野マサ子　受賞作「『夫婦の黙（もだ）』30句」

受賞作品「夫婦の黙」は、題名のように作者の情を詠ったもの、さらには、日常生活への洞察が作者の鋭い詩眼によって詠われている点に注目させられた。夫婦の情の微妙さの表白された作品には感銘を深めた。「長き夜やしんそこ長き夫婦の黙」

さらに言えば、この作者の句の特色は、日常些事に詩韻を求めて、平凡を非凡にし、詩として成功させている点に注目させられた。「世の諸悪抜きとるつもり草を引く」（吉田未灰委員選考概要から）



○詩部門　中澤睦士　受賞作「『冬の解答』ほか4編」

現代の最先端技術にかかわる環境の中で、自分の日常を感性的に捉えて、中澤さんならではの個性的な詩的世界を生み出していることが高く評価された。そこには現代人の孤独感を底流にした自然との関わりや家庭的な生活への憧れなどが、ときにはユーモアを交えて表現されている。今後さらに新たな表現世界を切り開いていくことも期待されている。（長谷川安衛委員選考概要から）

○小説部門　徳江和巳　受賞作「想い出映画館へようこそ」

勤めていた大手企業が倒産し、学習教材を売る仕事に就いたものの、ノルマを達成出来ない正一に、ふと死が胸をよぎる。そのとき男が現れて、正一を故郷の映画館に連れて行き、幼い頃の映像を見せ、二つの道、即ち幼い楽しい日々を永遠に生き続ける道と、この世に留まってもがき続ける道のどちらかを選ぶように言う。夜の歩道橋の上で潜在意識が見せた瞬時の幻影であるが、技巧を凝らしたドラマがあり、欠点の少ない短編として評価された。（三澤章子委員選考概要から）

○随筆部門　野村　豊　受賞作「旅ふらり　旅ぶらり」

「五十の手習い」で始めた絵画に、野村氏は現在では講師を務めるほどに熱中する。画材を求めての旅は、自ずから人との出会いの場となる。動き続ける旅ではなく、イーゼルを立てまたスケッチブックを開く静止の場は、人との出会いを呼び込むのであった。

野村氏はそうした人との出会いの場を丁寧な筆致で拾ってゆく。小さなしかし心温まる交流を描き出すのである。（林政美委員選考概要から）

○児童文学部門　金子敏江　受賞作「ぼくと洋太とジャングルの思い出」

主人公と弟は、自宅近くの草ぼうぼうであった道路建設予定地をジャングルに見立てて、遊ぶ場所にしている。ある日、二人はそこでタヌキと出会う……。主題が自然保護や動物愛護にとどまらず、登場人物がそれぞれ優しさやユーモアに満ちていて、説教色は微塵もない。場景描写や兄弟二人の性格の書き分けなどもよく描けていて、暖かい読後感がある。（深代栄一委員選考概要から）

カフェの隅から

赤いリボンの

竹田朋子

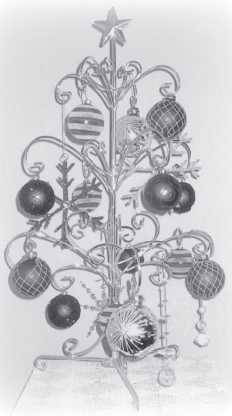
初冬を迎えるころになると、赤い色が恋しくなる。周囲から色彩が消え、寒さが増すからだろうか。

春や夏には少しうるさく感じる色だが、日暮れの早いこの時季、赤い色はどこか懐かしく、ほっとさせられる。

この色は私の中のさまざまな場面に、ちりばめられている。

クリスマスが近づくと、家業のカフェの定位置に小さなツリーが登場する。

高さ70センチ、シルバーのもみの木型のツリーに、テニスボール大の赤い球状のオーナメントを吊り下げる。紫を含んだ赤、ゴールドのラメ状の線入り、雪の結晶型などで、頂上にはお星様をいただく。



赤とシルバーのコントラストが暖房の風を受けて微かに揺れ、サンタの姿はないが、クリスマス近し、である。

これに合わせ、ポインセチアもかかせない。以前、珍しくてピンク色を飾ったが、やっぱり赤でないと、どこか物足りない。

この赤でないとのこだわり（？）が、もうひとつある。亡き祖母が作ってくれた太巻き寿司にいれる紅しょうがだ。

ひな祭りには必ず登場した祖母のそれは、海苔の大きさに焼いた薄焼き卵で巻いてゆく。中身は、かんぴょう、しいたけ、ちくわ、でんぷ、青味、そしてこれ以上は赤くできないと思われるほどの紅しょうがだ。シンプルな具の中の一点の赤。これこそが祖母のお寿司。それを作るときの祖母の割烹着は、いつも甘酸っぱい匂いがした。

最近、嬉しい赤に出会った。孫の誕生に駆けつけてくださったMさんは、まだ温かさの残るお赤飯を手渡された。包みを開くと、何と真っ赤なリボンが結ばれている。お庭の南天も添えてー。心に染みる嬉しさだった。

すてきな赤もある。某ホテルの、黒と白のしつらいの洗面台に飾られていた一輪のバラ。磨かれたガラスの一輪挿しに、すっと礼儀正しく伸びた赤いバラの存在感は、見とれるほどに鮮やかだった。

さて、クリスマスだ。赤い服は、キリスト教における「司教の正装」であり、慈愛の象徴だったため、サンタクロースの服は赤となったらしい。

赤いリボンのかかった素敵なプレゼントが、大人にも届くといいのに。

竹田　朋子〈略歴〉
長野原町出身／群馬ペンクラブ会員
散文誌「せせらぎ」同人／短歌誌「遠天」同人
第55回「日本随筆家協会賞」受賞／第46回群馬県文学賞受賞
著書『風の吹く道』

伊万利 RESTAURANT DINE
レストラン　伊万利ダイン
前橋市文京町 2-20-22 群馬県生涯学習センター別館 TEL：027-224-1693

群馬県・伊香保温泉

HOTEL 天坊

政府登録国際観光旅館
ロイヤルチェーンホテル加盟店
群馬県渋川市伊香保町396-20
予約直通 Tel.0279-72-4489

東京営業所 東京都台東区東上野6-10-7金子ハイツ503 〒110-0015
Tel. 03-3843-0083

埼玉営業所 埼玉県さいたま市中央区下落合4-23-10-101 〒338-0002
Tel. 048-856-1660

●料理茶屋 湯の花亭 上州四季の懐石

春 夏 秋 冬

味わいの旅

——四つの食事処で料理が選べる

アパマン・土地建物・
店舗事務所・土地活用

ペット可

株式会社 藤田ビジネスプロモーター
http://www.h3.dion.ne.jp/~fbp
前橋市問屋町一丁目1番1号 027-251-4455(代)

資産運用のご相談は、群馬銀行へ！

あなたの夢、応援します。
群馬銀行
http://www.gunmabank.co.jp/

編集後記

◇ この季節、木々の梢の上に広がる空は、高く青い。やがて凛とした冬だが、その前の小春日和は気持ちが清々として、牧水の歌を口ずさみたくなる。

「**今日もまた　心の鐘を打ち鳴らし**
打ち鳴らしつつ　あくがれてゆく」
（ＮＫ）

◇ 本誌希望の方は、送料（140円×希望回数分の切手）を添えてお申し込み下さい。また、ご要望ご意見等もお寄せください。

ⓒ 財団法人 群馬県教育文化事業団
（本誌からの無断転載、コピーを禁じます。）

上州文化
●第 124 号 ●平成 22 年 11 月 25 日発行（年 4 回発行）●発行人 小 見 輝 夫
●発行所 〒 371-0801 前橋市文京町二丁目 20-22 財団法人群馬県教育文化事業団
●電話 027-224-3960 ● URL http://www. gunmabunkazigyodan.or.jp/
●印刷 ㈱開文社印刷所 前橋市大手町三丁目 18-7